



TITLE:

序「カラム」の時代V:近代マレー ・ムスリムの日常生活

AUTHOR(S):

坪井, 祐司

CITATION:

坪井, 祐司. 序「カラム」の時代V: 近代マレー・ムスリムの日常生活. CIAS discussion paper No.40: 「カラム」の時代V--近代マレー・ムスリムの日常生活 2014, 40: 4-8

ISSUE DATE:

2014-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228613>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

序『カラム』の時代Ⅴ

近代マレー・ムスリムの日常生活

坪井 祐司

本論集は、1950年から1969年までシンガポールで発行された月刊誌『カラム(Qalam)』について、テーマごとに掲載記事を紹介する研究ノートをもとめたものである。以下では、まず『カラム』誌について簡単な紹介を行ったうえで、この論集のもととなった『カラム』プロジェクトおよび本論集の各論の内容を紹介する。

なお、この本編は『カラム』を利用した共同研究における論集の五編目にあたるものである。このため、『カラム』誌およびプロジェクトの紹介については、過去四編の論集の序論と重なる部分があることをあらかじめおことわりしておきたい。

1. 『カラム』について¹⁾

『カラム』は、1950年7月にシンガポールにおいてエドルス(Edrus)²⁾により創刊され、エドルスの死去により1969年10月を最後に停刊するまで228号が発行された。この20年間という発行期間は、創刊後1、2年で停刊となることがめずらしくなかった当時のマレー語雑誌としては長いものであった。これは、同誌がマレー・ムスリムの間に受け入れられていたことを示している。

『カラム』の特徴は、第一にその記事が一貫してジャウィ(アラビア文字を改変したマレー・インドネシア語の表記法)によって書かれていたことである。マレー・インドネシア語の表記法は、この地域のイスラム³⁾化とともにアラビア文字を使用したジャウィが主流となった。しかし、19世紀後半以降ヨーロッパの植民地権力によりマレー語の公式のローマ字表記が定

められ、行政や教育の場で使用されるようになって、徐々にジャウィはローマ字にとってかわられた。旧オランダ領(現インドネシア)地域では20世紀初頭以降、旧イギリス領(マラヤ、シンガポール)でも1960年代までに多くのマレー語刊行物がジャウィからローマ字表記に切り替わった。しかし、『カラム』は創刊以来1969年の停刊まで一貫してジャウィ表記を固守した。これは、『カラム』が非ムスリムを含めた幅広い読者を獲得することよりも、対象をムスリムに限定した主張を発信することを目指していたためであろう。

第二に、国境を越えた東南アジアのムスリムの紐帯を強調したことである。シンガポールで発行されていた『カラム』の主な読者はシンガポール、マラヤ在住者であったが、執筆者のなかにはシンガポール、マラヤだけではなくインドネシアのムスリム知識人も含まれていた。このため、インドネシアやその他の東南アジアのムスリム社会の情勢を含む幅広い内容の記事が掲載された。さらに、エジプトなど中東で学ぶ留学生も寄稿しており、中東のイスラム思想を積極的に紹介した⁴⁾。

『カラム』の第三の特徴は、この地域の他の定期刊行物との交流である。『カラム』の記事のなかには、他の刊行物に掲載されていた記事が転載されたものもある。また、英語も含めて新聞・雑誌記事などを引用し、それに対して論評を加えたものもある。このため、『カラム』をみることで、単に同誌の主張というだけでなく、当時のこの地域のジャーナリズムの世界でなされていた議論のあり方や内容をうかがうことができる。

『カラム』は当時のマレー語ジャーナリズムの一翼を担っており、そのなかで民族主義に対抗するイスラム主義勢力の思想を代表する媒体と位置づけられる。『カラム』が刊行されていた1950年代、60年代はマラヤ(マレーシア)、シンガポール、インドネシアにおける脱植民地化の時期であり、民族主義勢力によるそれぞれの国民国家の建設に関心が集中している。このため、同時期の政治や社会におけるイスラム主義勢力の

4) 編集者エドルスが1956年にシンガポールにおけるムスリム同胞団を結成すると、『カラム』編集部は事務局となり、『カラム』は同団体の事実上の機関誌となった[山本2002a: 263]。

1) 『カラム』誌については、[山本2002a]が詳細な紹介を行っている。

2) 本名はサイドアブドゥッラー・アブドゥルハミド・アルエドルス(Syed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus)、『カラム』ではエドルス、アフマド・ルトフィ(Ahmad Lutfi)などのペンネームを使用していた。1911年に当時のオランダ領東インド・カリマンタンのバンジャルマシンでアラブ系の両親のもとで生まれた。その後シンガポールにわたって出版・文筆活動を開始し、1948年にカラム出版社(Qalam Press)を立ち上げた。彼の伝記として[Talib 2002]がある。

3) 現在学術用語としてはイスラムと表記するのが一般的であるが、マレー・インドネシア語には長母音が存在しないため、本稿では現地の発音に即してイスラムと表記する。ただし、以下の各論において用語の選択は著者にゆだねられているため、表記が混在する結果となっていることをあらかじめお断りしておく。

動向には焦点が当てられてこなかった。しかし、『カラム』の記事からは、当時のムスリム知識人がこれらの国々が独立国家となってもさまざまな形で国境を越えたムスリムの連帯を模索し、対案を提示していたことが明らかになる。

『カラム』は当時のマレー・イスラム世界の知識人の思想や活動を明らかにする上で貴重な資料であるにもかかわらず、これまで十分に利用されてこなかった。これは、『カラム』がジャウィで書かれているために利用者が限定されてしまっていたことにくわえて、複数の機関に分散して所蔵されていたため体系的に利用するのが困難であったことなどが理由として考えられる。

以上の認識のもとで、本論集のもととなる『カラム』プロジェクトは、同誌を収集して一つの資料として集成したうえで、記事の見出しおよび本文をローマ字に翻字してデータベース化し、一般公開して研究のための便宜を向上させることを目的としている。

2. 『カラム』プロジェクト

現在の『カラム』プロジェクトは、京都大学地域研究統合情報センター（以下京大地域研と略記）の共同研究「脱植民地化期の東南アジア・ムスリムの自画像と他者像（研究代表者：坪井祐司）」および「ジャウィ文献と社会」研究会が中心となって行われている。『カラム』の所蔵機関である京大地域研の共同研究は、山本博之を中心として立ち上げられ、本年度で5年目となる。「ジャウィ文献と社会」研究会は、2009年に解散したジャウィ文書研究会の研究を継承し、発展させるための研究会の一つである⁵⁾。

プロジェクトの主たる活動は、『カラム』に関するデータベース構築、一般向けのジャウィ文献講読講習会、『カラム』を使用した研究である。ここでは、プロジェクトの現時点の成果と今後の方向性についてまとめてみたい。

(1) 『カラム』雑誌記事データベース

プロジェクトの基礎となる資料である『カラム』は、山本博之により収集された。山本は、シンガポール国立大学図書館、マラヤ大学ザアバ記念図書室における資料収集により、『カラム』全228号のうち212号を収集した。それをもとに、京大地域研が進めている雑誌記事データベース・プロジェクトの一部として紙面をデジタル化

し、それぞれの記事の見出しのローマ字翻字を関連付ける作業を行った。これによってローマ字による記事見出しの検索により当該紙面を呼び出すことができるデータベースが作成され、一般に公開されている⁶⁾。

ただし、京大地域研の『カラム』雑誌記事データベースは、現在のところローマ字による記事見出しの検索にとどまっており、記事本文の検索はできない。本文も検索の対象とするためには、記事をローマ字へと翻字してデータ化し、それをデータベースに連結する必要がある。このため、2009年から「ジャウィ文献と社会」研究会のメンバーによる『カラム』の記事本文の翻字作業が開始された。

『カラム』記事のローマ字翻字作業は、2011年度から京大地域研の地域情報学プロジェクト（雑誌データベース班）による事業として行われることになった。これは、マレーシアの出版社クラシカ・メディア（Klasika Media）社との提携により行われているもので、『カラム』のすべての記事を年代順に翻字し、検索が可能なPDFファイルをジャウィ版と同様のレイアウトにして作成するものである。この成果は、「ジャウィ文献と社会」研究会のホームページにて順次公開されている。プロジェクトメンバーのジュリアン・ブルドン（京大地域研）により、翻字された記事本文をデータベースに組み込み、本文中の単語の検索から当該紙面を読み出せるようにする『カラム』データベースの改良も進行中である。

さらに、『カラム』雑誌記事データベースは、他のマレー・インドネシア語文献やコーランなどアラビア語文献のデータベースとの接合が構想されている。これに関してさしあたり期待されるのは以下の方向である。

第一に、『カラム』以外の資料を含めたマレー・インドネシア語文献の統合データベースの構築である。地域や時代を越えた記事の横断的な検索は、マレー・インドネシア語定期刊行物の研究には重要である。マレー・インドネシア語雑誌は短期間のうちに停刊となるものが多いが、同じ編集者や執筆者が別の雑誌を立ち上げることもめずらしくない。くわえて、その内容においても、雑誌の枠を越えた引用や論争が行われてきたため、複数の雑誌を一つの言論空間、資料群としてとらえる必要がある。このため、京大地域研の雑誌記事データベース・プロジェクトでは、刊行期間が長いマレー・インドネシア語定期刊行物を収集し、誌

5) 「ジャウィ文献と社会」研究会の詳細については、同会のホームページを参照 (<http://ylabo222.wix.com/jawi#>)。

6) 『カラム』のデータベースについては、京大地域研のホームページを参照 (http://area.net.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003QALAM)。

面のデジタル化および記事見出しによる検索可能なデータベース作成を進めている⁷⁾。

もうひとつは、オーストラリア国立大学が実施しているマレー語文献コンコダンスプロジェクト(以下MCプロジェクトと略記)との連携である⁸⁾。MCプロジェクトでは、主に20世紀以前の王統記を中心に本文テキストをローマ字化したものをもとにコンコダンスを作成し、データを順次公開している。また、シンガポール国立大学は1930年代のマレー語日刊紙のローマ字翻字を行っており、この結果をMCプロジェクトと接合することが計画されている。これに1950、60年代を主に扱う京大地域研の雑誌記事データベースを接合することで、より広い範囲のマレー・インドネシア語文献を包括した統合データベースを構築することができよう。

(2) ジャウィ文献講読講習会

『カラム・プロジェクト』の活動の二つ目は、マレー・インドネシア語既修者を対象にジャウィ文献講読講習会を開催することである。講習会は参加者を一般公募して行っており、日本において触れる機会の少ないジャウィを学ぶ機会を提供することと、ジャウィに関心を持つ研究者のネットワークを深化させることを目的としている。講習会は2009年以来年1回行っており、2013年は地域研究コンソーシアム、日本マレーシア学会との共催により10月13、14日の2日間に実施した。講習会は、2011年から日本で唯一のマレーシア語専攻を有し、ジャウィをカリキュラムに組み込んでいる東京外国語大学のファリダ・モハメド講師の全面的な協力を受け、同大学にて開催している。今回も例年通り外語大の学生を中心に多数の参加者を得ることができ、あらためてジャウィに対する関心の高さが示された。

研究会では、講習会のための教科書『ジャウィを学ぶ』を編集した[坪井・山本編2013b]⁹⁾。これは、ジャウィの読み方・綴り方を開設した[山本2002b]を採録したジャウィ講読の初級編、『カラム』記事から引用した講読テキスト、近代におけるジャウィの定期刊行物(『ジャウィ・プラナカン』、『アル・イマム』など)の実物を掲載しその解説を行った「さまざまなジャウィ文献」、研究会メンバーが各自の専門分野におけるジャウィ資料を紹介・解説した「資料編」からなっている。

7) 京大地域研でデータベース化を進めている雑誌の詳細については、[山本編 2010: 6]を参照。

8) 詳細については、プロジェクトのホームページを参照(<http://mcp.anu.edu.au/Q/mcp.html>)。

9) この教科書は、2011年に編集された初版をもとに、資料編等で新たな内容を収録した改訂版である。

(3) 『カラム』共同研究

プロジェクトの活動の第三は、『カラム』を利用した研究活動である。プロジェクトでは、メンバーがそれぞれの問題関心に基づき『カラム』の記事を利用した研究を行っている。共同研究では年に3回程度の研究会を開催して議論を行っており、その成果としてまとめられたのが本論集である。ディスカッションペーパーは2010年以来年1回発行されており、これが5編目となる。その内容については次節で紹介することとしたい。

さらに、2013年度に顕著な進展を見せたのは、国際的提携の分野である。プロジェクトでは『カラム』研究を国際共同研究へと発展させるため、マレーシアにおける共同事業や成果の発信に努めている。

2013年度からは、京大地域研とクラシカ・メディア社、マレーシアジャウィアカデミー(Akademi Jawi Malaysia)との提携により、『カラム』に関する電子出版事業が開始された。2013年9月11日には、京大地域研の林行夫センター長などが参加して事業の立ち上げを記念する会議がクアラルンプルのプトラ・ホテルで行われた。この会議には、主筆エドルススの遺族の出席を得ることができた。

電子出版事業は以下の二つからなる。第一には、ローマ字翻字された『カラム』記事の中から現在の読者の関心が高いと思われるものを抜粋して復刻するものである。そのなかには、エドルススの「独立インドネシア訪問(Melawat Indonesia Merdeka)」、ブルハスッディン・アルヘルミの「マラヤにおける民族主義闘争(Perjuangan Kebangsaan di Malaya)」などが含まれる。第二は『カラム』の研究の出版である。プロジェクトの共同研究の成果の一部として、論文集『伝統から将来へ: カラム誌論集1 (Dari Warisan ke Wawasan: Selected Writings on Majalah Qalam Volume 1)』が出版され、今後も続いていく予定である。

2013年12月20、21日には早稲田大学イスラーム地域研究機構、マラヤ大学アジアヨーロッパ研究所などの共催による国際会議「イスラームと多元文化主義」にセッション企画を組む形で参加した。セッションでは、モハメドシュクリ(Mohamed Syukri Rosli、クラシカ・メディア)、ジュリアンがデジタルアーカイブの構築と利用について、光成歩と坪井がデータベースを利用した研究について報告し、出席したマレーシア人研究者を含めて『カラム』の現代的意義についての活発な議論が交わされた。

プロジェクトでは、今後ともマレーシアの研究・出

版に関わる諸機関と連携し、デジタル化した『カラム』の公開、共有を進めるとともに、研究面でも国際的な共同研究へと発展させていくことを計画している。

3. 本論集の構成

本論集の各論考は、写真、広告、連載コラムといった『カラム』の象徴的な特徴を分析し、その世界観を描き出そうとするものである。以下、その内容を簡単に紹介したい。

坪井祐司「カラムが切り取った世界 ——写真が語る東南アジア・ムスリムの世界観」

坪井は、『カラム』に掲載された写真を取りあげている。『カラム』は国際ニュースを中心に全世界で撮影された多様な写真を掲載した。これらの写真は、さまざまな地域で戦争や政治運動がおこった激動の時代を映しだしている。写真は、『カラム』を発行する東南アジアのイスラム知識人の視角により切り取られており、ヨーロッパの植民地統治からの独立、西洋近代がもたらした政治・経済体制からの脱却を目指すムスリムの運動が描かれた。同時に、『カラム』は市井の個人や都市の景観も多くとりあげており、特に社会に進出する女性に焦点が当てられた。ただし、女性には、イスラム対西洋近代の構図のなかで、あくまで宗教的な正しさが求められた。『カラム』は、アメリカに代表される近代性に憧憬を示す一方で、過度な西洋化も批判した。女性の地位をめぐる近代主義とイスラムの葛藤は、現在にまで続く課題といえる。

光成歩「1950年代初頭『カラム』の広告商品にみるムスリムの消費文化」

光成は『カラム』に掲載された広告を取りあげた。広告からは、当時のムスリムたちがどのような市場のなかに身を置いていたのかを知ることができる。広告にはときに複数の言語が横並びに書かれ、商品の売り手、買い手の多様性が表れていた。市場を構成する事業者は、華人、インド人、アラブ人、マレー人、ヨーロッパ人など多様であった。ヘアオイルや香水などでは宗教的な価値をアピールする商品が多くみられたが、すべてがそうであったわけではなく、電化製品や時計など、ヨーロッパやアメリカからの輸入商品としての質やデザインのよさが強調されたものも多かった。宗教や中東と結びつけて語られる付加価値は、高級感や質

を担保するみなされた商品もあったが、横並びの様々な付加価値のなかの一つにすぎないものであった。

金子奈央「マレー・コミュニティにおける 家族・子ども・教育」

金子は、読者からの寄せられた様々な相談にイスラム教の立場から答える連載コラム「千一問」を取りあげ、家族、子ども、教育といった話題がどのように扱われたかを分析した。そこでは、最も身近な集団である家族がいかにして築くかについて多くの質問が寄せられ、回答では「正しい人間」を育てるための家庭および宗教の責任、重要性が強調された。また、教育については、マレー人の学業における立ち遅れが議論とされたが、問題はマレー人という民族ではなく彼らがおかれた環境によるとされ、同時に正しい人間となるためのイスラム教育の重要性が強調された。イスラム教の教えに基づいた正しい人間としての道徳心や信仰心を持つことが、個々人の人生においても、またマラヤの発展にとっても重要であるという考えが基盤となっていたと考えられる。

モハマド・ファリド・モハマド・シャーラン(訳 鈴木真弓) 「『カラム』と独立準備期マラヤにおける 宗教的世界観とナショナリズム」

本書にはマレー人研究者による『カラム』に関する論稿も収録した。『カラム』は1950年代から1960年代のシンガポール、マレーシアで広範な読者を得た定期刊行物として史料価値が高いにもかかわらず、マレーシアの現代史研究では長く光を当てられてこなかった。刊行地が移ったこともあって図書館等で体系的に収集されていなかったことや、ローマ字が普及してジャウィの書物が読まれなくなった等の理由のほか、に、『カラム』の創刊者・編集者エドルスが与党UMNOや宗教指導者に批判的だったことなどが理由に挙げられる。ムハンマド・ファリドは『カラム』の記事内容を検討し、当時のムスリムが西洋による科学技術の進歩から取り残されることや東側陣営からの共産主義の脅威に対抗するためにイスラム教に根ざした同胞意識の養成を掲げており、建国期のマレー・ナショナリズムの育成に重要な役割を果たしたとして、その資料的価値を評価した。マレーシア現代史研究において『カラム』が再評価されることは、建国50年を経てマレーシア史の見直しが行われるなかで重要な意義がある。

山本博之「東南アジアの現地語文献のデジタル・アーカイブ化プロジェクト——2013年度の活動紹介」

『カラム』は、京大地域研によりローマ字翻字とオンライン・データベースの制作が進められてきた。これによってマレーシア国内でも『カラム』記事へのアクセスが容易になり、研究が進むと同時にそれを利用した取り組みがマレーシアで見られるようになった。マレーシアでジャウィ教育教材として『カラム』が活用されるようになり、ローマ字翻字版とジャウィ版を左右に併記した復刻版がマレーシアの公立図書館に配架される予定である。『カラム』のコラムを抜粋してローマ字で刊行した電子ブックも刊行されるなど、マレーシア社会が積極的に『カラム』に価値を見出し、利用しようとしている。日本を拠点に始まった『カラム』プロジェクトがマレーシアにどんなインパクトを与えつつあるかについては山本の論稿を参照されたい。

4. 『カラム』の時代

各論考はいずれも限定された資料をもとにした試論であり、当該時期の社会全体への位置づけについては今後の検討課題となるであろう。ここでは、暫定的なまとめとして、本書の3編の論考から浮かび上がる『カラム』の特徴とシンガポールを中心とするマレー・ムスリムにとっての1950年代という時代性について簡単に記してみたい。

『カラム』は、第二次世界大戦後のマレー語出版界の活況なかで登場した雑誌である。この時期、ナショナリズムに代表される政治運動の高揚にくわえて、多色刷りで写真をふんだんに使用した大衆的な雑誌も増加した。カラム出版社は、『カラム』のほかに『フィルム(Film)』、『アネカ・ワルナ(Aneka Warna)』など娯楽色の強い雑誌も発行していた[Hamed 2013: 58]。『カラム』の記事の多くは政治や宗教を扱うものであったが、マレー語出版物の大衆化という時代のなかで位置づける必要がある。

このため、『カラム』は写真や広告など読者の視覚に訴える要素を多分に持っていた。また、「千一問」のような読者からの投稿欄も設けられており、双方向性を持っていた。そこから、執筆に携わった知識人だけではなく、読者として想定される主に都市部のマレー・ムスリムの世界観や生活の様子をうかがうことができる。

そこにうかがえるのは、西洋近代が圧倒的な力を持っていた時代、しかもムスリムが少数派である都市

部において、彼らが自らの宗教的な正しさと社会との折り合いを模索する姿である。『カラム』の時代、西洋近代の諸制度とその物質文化はゆるぎないようにみえた。その先頭を走るアメリカの写真や、欧米の製品の広告が頻繁に掲載されたことはそれを物語る。その西洋近代がもたらした国家制度のなかの教育も肯定的に受け止められた。他方、近代生活を送るうえで宗教的な正しさが求められる点も指摘されている。家庭や個人の育成におけるイスラム教育の役割が強調され、宗教的に正しい商品には付加価値がつけられた。その一方、女性の社会における位置づけなど、イスラム教と西洋近代との間に齟齬がみられる部分は論争の種となった。写真、広告、コラムを通じて『カラム』という雑誌全体を俯瞰することで、当時のムスリムが近代の多民族社会の中で自らを位置づけようとする過程をうかがうことができるのである。

参考文献

- Hamed Mohd Adnan. 2013. *Majalah Melayu Selepas Perang: Editorial, Sirkulasi dan Iklan*. Kuala Lumpur: Penerbit Universiti Malaya.
- Talib Samat. 2002. *Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- 坪井祐司、山本博之編 2011 『『カラム』の時代Ⅱ——マレー・イスラム世界における公共領域の再編』(CIAS Discussion Paper No.19) 京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司、山本博之編 2012 『『カラム』の時代Ⅲ——マレー・イスラム世界におけるイスラム的社会制度の設計』(CIAS Discussion Paper No.23) 京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司、山本博之編 2013a 『『カラム』の時代Ⅳ——マレー・ムスリムによる言論空間の形成』(CIAS Discussion Paper No.32) 京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司、山本博之編、ファリダ・モハメッド協力 2013b 『ジャウィを学ぶ』(CIAS Discussion Paper No.38) 京都大学地域研究統合情報センター。
- 山本博之 2002a 「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』、20: 259-343。
- 山本博之 2002b 「ジャウィ綴りマレー語の書き方と読み方: 20世紀マレーシア地域を中心に」『上智アジア学』、20: 359-382。
- 山本博之編 2010 『『カラム』の時代——マレー・イスラム世界の「近代」』(CIAS Discussion Paper No.13) 京都大学地域研究統合情報センター。